



そろばんは頭をよくする魔法の道具。

いよいよ今月は年度末、そして来月は新年度ですね(^^)。

新型コロナウイルスの関係で、日常生活のさまざまな点に至るまで行動の制限を受け、精神的にも物理的にも不自由な生活を強いられていますね。感染防止のためには仕方がないと理解できるものの、やはりフラストレーションは感じてしまいます。年度の変わり目でもあるし、新たな春の訪れとともに気持ちが一新されるような「普通の日常」が戻ってきて欲しいと心より願っています。



## 津波耐えた桜、そろばんに 小野の製造業者が2年かけ製作

東日本大震災から10年を前に、兵庫県小野市垂井町のそろばん製造卸売業「ダイイチ」が、宮城県気仙沼市で被災した桜の木を使ってそろばんを製作し、被災地に贈った。同市内の川沿いにあった桜並木58本の一部で、10年前の津波に耐えたが、堤防工事に伴い半数以上が伐採された。同社に再利用を提案したそろばん教室講師木村祐子さんは「思いの詰まった桜が帰ってきてくれた」と感慨深げだ。



震災で同市は最大20メートルの津波に襲われた。桜並木は気仙沼湾から約2・3キロ離れた神山川の土手にあり、濁流は川を遡上（そじょう）して押し寄せたが、流出は免れた。40～50年前に地元住民が植えた桜は塩害にも負けず、その後も花を咲かせ続け、毎年4月中旬ごろに近隣住民たちを楽しませた。

震災から5年後、復興事業に伴う堤防の整備計画が浮上。当初は全ての桜が伐採される予定だったが、住民の反対運動もあり、19本を残すことになった。2017年末に切られた39本の一部は無償で住民に提供された。

木村さんのそろばん教室も津波被害で川の上流地域に移転したが、震災前まで神山川沿いにあった。春になると、教室から桜が見え、自宅から教室に通うのも、土手沿いの道だった。

「せっかく津波を生き残った桜なのに。このまま捨てられるのは…」。思案した木村さんは木材の提供に応募するとともに、会員制交流サイト（SNS）に「桜でそろばんができないかな」と書き込んだ。

木村さんが以前、そろばんを発注していたことから、SNS上で親交のあったダイイチの宮永英孝社長。その書き込みを見て、すぐに製作を決意した。

18年、木村さんから木材が届いた。2年近く乾燥させた後、製作を開始。柔らかい材質の桜は本来、そろばん製作には向かない。宮永さんはそれでも職人たちを説得。慎重に玉削りなどを進め、今年1月までに24丁を完成させた。

「阪神・淡路大震災が起きた兵庫県民として、なんとしても力になりたかった。桜が生きていた証しを作ることができ、うれしい」と宮永さん。4丁を受け取った木村さんも「そろばんには桜を見てきた私たちの思いがこもっている」と笑みを浮かべた。

(2021/3/4 神戸新聞 NEXT より転載)

10年前のあの瞬間、どこで何をしていたのかを記憶している方は多いと思います。私の場合はクルマで教室へ移動中でしたが、そのとき、走行中の車内でも揺れを感じた程でした。天災は避けようがないかも知れませんが、日ごろから災害に対する備えをしておきたいと改めて感じます。

\*\*「ダイイチ」は播州そろばんで有名な兵庫県小野市にあり、

ユニークなそろばんグッズを製作している会社。

善意のつながりを経て、さまざまな思いが詰まった

ソロバンが完成したことは素晴らしいことですね。

